



## 「気象災害の事典—日本の四季と猛威・防災—」

新田 尚 監修

酒井重典・鈴木和史・饒村 曜 編

朝倉書店, 2015年 8 月

558頁, 12,000円 (本体価格)

ISBN 978-4-254-16127-4

「気象災害」というタイトルの本を書くのは難しい。なぜならば、気象災害には自然現象のみならず、人工構造物の破壊や社会現象等も含まれるからである。したがって、気象災害すべてを網羅した書籍を執筆しようとする、気象学や水文学といった理学分野だけでなく、河川工学や地盤工学などの工学分野、さらには社会科学や心理学までカバーする必要が生じる。これらの内容をすべて一冊に含めるのは不可能であるから、「気象災害」というタイトルの本は、必ず気象災害のある部分に焦点を当てて書かれている。「気象災害の事典」もその例にもれず、気象災害の外力である「災害を引き起こす気象」に焦点を当てている。むしろサブタイトルの「日本の四季と猛威・防災」が本書の内容を正確に表している。

本書は気象災害にかかわる247項目を取り上げ、それぞれ2ページ程度を割いて解説している。「気象災害について解説書として読みやすく、特に防災に役立てることを意識してできるだけ平易に表現した」と序章に書かれている通り、それぞれの項目は初学者にも理解できるよう分かりやすく書かれている。項目は気象のみならず、「地すべり」「深層崩壊」「洪水」といった地面の現象や、災害に関する法律なども一部含んでいる。本書を机の横に置いておき、気が向いた時にパラパラめくって気楽に読むこともできる。自分が知っていると思っている事項でも、意外と知らないことがあったり、執筆者と自分との見解の違いがあったりして、結構楽しめる。

本書はその構成に特徴がある。以下に目次を示す。

- 第1章 春の現象
- 第2章 梅雨の現象
- 第3章 夏の現象
- 第4章 秋雨の現象
- 第5章 秋の現象
- 第6章 冬の現象

第7章 防災・災害対応

第8章 世界の気象災害

付表 日本・世界の気象災害年表

このような季節別の章分けは、住民に対して注意喚起をするべき立場の人、例えば国や地方自治体の防災担当者等には非常に役立つと思われる。一例をあげれば、中央防災会議は季節ごとに「防災態勢の強化について」という通知を指定行政機関や指定公共機関に送付している。もし通知を受け取る防災担当者が本書を参照すれば、季節ごとにどのような災害に注意すべきかを具体的に知ることができ、注意喚起の内容をより深く理解することができるであろう。

本書のもうひとつの特徴として、日本で起こった過去の大規模な気象災害について多くの項目を割いていることが挙げられる。例えば台風災害だけでも「シーボルト台風」「明治29年9月洪水」「平成16年台風23号」など、全部で21項目が取り上げられている。その記述内容も臨場感にあふれており、大変参考になる。例えば1947年に東京都に大水害を引き起こした「カスリーン台風」の項目では、「利根川の堤防が、16日1時頃の埼玉県北埼玉郡東村（現大利根町）栗橋付近で決壊した。江戸時代から『ここが切れたら浅草の観音様の屋根まで水につかる』と言われ、堤防も利根川最大の8m50cmとしていちばん重点が置かれていた場所での決壊である」と書かれており、当時としては最大限のハード対策を図っていたにもかかわらず、想定を超える外力によって大災害が生じたことがよく分かる。現代でも同様の、利根川上流の決壊による首都圏広域氾濫が懸念されており、内閣府から被害想定が公表されているところである。過去の災害を知るとは、今後の災害対策を考える上で非常に重要であり、「過去の気象災害を伝承する」という編集者の熱い思いを感じる。

なお執筆者の大半が気象庁職員または関係者であるためか、「ゲリラ豪雨」や「爆弾低気圧」という項目がない。ただしこれらの用語は索引には書かれており、それぞれ「局地的大雨」「急発達する低気圧」の項目にたどりつくことができるような配慮がなされている。

細かいことを言えば、地形性降水の基本的なメカニズムであるシーダ・フィード機構について言及がないなど気になる点もあるが、とにかく今回、「気象災害の事典」初版が刊行されたこと自体を賞賛したい。気象災害が起こるたびに、目新しい用語がマスコミに

よって報道され、時には間違った用語や定義が一人歩きすることがある。多くの方が本書を手取ることで、災害を引き起こす気象に関する正しい用語や理解が普及していくことを期待したい。また本書が未永

く版を重ね、その都度新しい用語を取り入れながら、さらに発展していくことを望みたい。

(防災科学技術研究所 三隅良平)